

分布管理の現状と最新技術と注意点

坪井潤一（水産研究・教育機構 中央水産研究所 内水面研究センター）

はじめに

カワウの生息状況モニタリングが重要です、と言われ続けて早 20 年。分布を把握することすらままならない現状がいまだに続いている。被害主体はカワウが少ないに越したことはないので、本気を出してカワウを探したくない、という深層心理もはたっているのかもしれない。しかし、ぱっと見でカワウが減った時、楽観的に自然減を疑うのではなく、どこかに飛び火、つまり、新しいねぐらや繁殖コロニーができた、と考えるのが基本である。なぜなら、餌（魚類）の資源量に応じてカワウの生息数も決まっているため、魚類の資源量が変わらなければ、カワウの数もそう簡単には変わらないからだ。

この発表では、今一度、基本に立ち返り、①モニタリングをしっかりと、いつ（季節変化）、どこにカワウが多いかを常に把握すること、②ねぐら・コロニーが新たに発見された際のアプローチについて、実例をもとにお話したい。また、現在、全国で普及しつつある③ドローンを使ったカワウ個体群管理策の最前線についても紹介する。

①モニタリングをしっかりと

「カワウを数える・データをまとめる・地図化する」（平成 29 年全国内水面漁業協同組合連合会 <http://www.naisuimen.or.jp/jigyuu/kawau/kawau201701.pdf>）で紹介されているとおり、カワウのモニタリングには、採食場所（例えばアユ放流場所）での飛来数調査、新しいねぐら・コロニーの探索、ねぐら・コロニーでの生息数調査の 3 つに分類される。この集合住宅であるねぐら・コロニーを正確に把握し、そこでの生息数を定期的にカウントすることがカワウ対策成功の絶対条件となる。

②ねぐら・コロニーが新たに発見されたときの対処方法

新たに発見されたねぐら・コロニーは、多くの場合、当該水系を超えて被害を及ぼしている場合が多い。そのため、市町村はもちろん、都道府県の鳥獣被害対策をつかさどる課（みどり自然課等）に報告したうえで、今後の対策について合意形成を図る必要がある。被害は何か（水産被害、生活被害、森林枯死などの環境被害）、許容は可能か（どこかには置いておかなくてはならない）、対策実施の可否など、状況を総合的

に判断して、とるべき対策を慎重かつ迅速に検討する必要がある

③ドローンを使ったカワウ個体群管理策

ドローンを使えば万事 OK というのはまったくの幻想である。先述の①②をきちんとやった上で、ドローンを導入することを検討すべきである。ドローンは墜落のリスクが常につきまとう上、雨風にめっぽう弱い。パソコンが飛んでいると思ってもらっていい。そのため、ドローンは奥の手である。だれが飛ばすのか、つまり、だれがリスクを背負うのか、という問題もつきまとう。一方で、近年、カワウがねぐら・コロニーを形成するのは、ドローンでしか行けないようなアクセスの悪い場所（ダム湖の対岸の断崖絶壁等）であることも多い。水産庁委託事業の実証試験として、北は秋田から南は広島まで、ドローンを活用してカワウのねぐら・コロニー除去のためのビニルテープ張り（写真 1）を行ってきたので、動画を交えてご紹介したい。



写真 1. ゴルフ場に新たに形成されたカワウ繁殖コロニーをドローンを活用したビニルテープ張りによって除去する（平成 30 年 6 月 栃木県宇都宮市）